

ムラのミライ 活動レポート & ニュース

2019
11

CONTENTS

Report 1 村人と一緒に見つける技術

「農村で暮らし続けるためのファーマーズ・スクール」プロジェクト

Report 2 言葉をつむぐことで生まれた力

「西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪」プロジェクト

Report 3 ふたつの現場、ふたつの目

専門家派遣事業



認定NPO法人ムラのミライ

関西事務所(本部) 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22 早川総合ビル3F

電話/ Fax 0798-31-7940

高山事務所 〒506-0031 岐阜県高山市西之一色町3丁目820番地1

E-mail info@muranomirai.org ウェブサイト <http://muranomirai.org/>

村人と一緒に見つける技術

和田 信明(ムラのミライ 海外事業統括)

菊地 綾乃(ムラのミライ 海外事業コーディネーター)

セネガルプロジェクトが始まった2017年、ムラのミライに入職し、約1か月の日本事務所勤務を経てセネガルに赴任した菊地綾乃。新鮮な目で見たムラのミライの活動方法論と、彼女自身がそれを身につけてきた様子を、師匠の和田信明と共にふりかえりました。

最初に見た研修 プロジェクトの進め方

菊地：セネガルに赴任したのは2017年5月9日。2日ほど街中のホテルに泊った後、ダカールから70キロほど離れたンブルという町に移動しました。翌日から村での研修。最初はンディヤマヌ村でした。村の中心地にスペインの支援で作った私立の小学校が建っていて、その一室、ちょっと薄暗い部屋をお借りしてやりました。

和田：どういった話の入り方をしたか覚えてますか？

菊地：洪水というキーワードから始まって、水が流れていくとどうなるのか、土はどうなるのか、それにはどういう意味があるのかというところから始まりました。



村の地図も書いてもらって、水の流れも紹介してもらったんですけど、和田さんが「この村で洪水が起こったのは、いつからですか？」と聞いたのが切り口だと思っています。

和田：その質問を聞いて、どのように会話が進むと思われましたか？

菊地：全然予想ができませんでした。

和田：洪水のことを聞いてから、和田は結論をどういう風に持っていきましたか？

菊地：洪水がいつから起きたのかを聞くと、洪水が起こり始めたのは最近だったんですね。その後に村の中を歩きながら、昔と何が違うのか、メカニズムを説明していたのを覚えています。砂を見て状態を確認する。なめてみるとしょっぱい。「しょっぱいと農業ができないよね、どうしてこういう事が起きるのだろう」と問いかけながら村を歩く。戻ってから何を見たかをふりかえる。そして洪水の起こるメカニズムに戻り、最近起きた事、つまり雨が降った時、土が吸水する機能を果たせてないことを理解する。たとえば土に植物が何もないさら地があって、そういう土地では雨が降った時に洪水が起きていた。木や草が生えているところでは、雨が降っても吸水して、水が保たれていたということに気づく。



和田：このプロジェクトは何をするものかという事を、最初に研修を見た時に考えましたか？

菊地：三つの村での研修に同行して、農民たちが村のことを観察したり、ふりかえったりしながら、自分たちの村で何が起こっているか気づく、それに対して自分たちで行動を起こせるように背中を押す、という事が研修でも良く見えました。

赴任前に、日本で何度かメタファシリテーションの講座を受けていました。

講座では1対1で練習しますが、村での研修は1対複数なので、研修生から色々な答えが返ってくるんですね。基本的なやり方は同じだと思うのですが、とても高度に感じました。

一人に対しても質問を繰り返すのが難しかったので、複数に対し、色々な答えに対して、自分を見失わないように目指す所に行くというのが大変だと、村での研修に何度も同行するうちに分かりました。

観察と聞き取り

和田：村での研修に初めて同行したとき、他に何かしましたか？

菊地：一緒にいた中田からクイズを出されました。研修会場の部屋を見て、「何か気づいたことは？一番新しくされたことは何だろう？」というクイズ。良く見ると、色々な本やDVDのある本棚があり、使われてなさそうなテレビもあり、また黒板に文字も書かれていた。私が「黒板の文字ではないですか」と言ったら「いや違う、壁を見なさい」と。見ると、セメントの壁の一部に濃い色、粘土質の部分があって、修理した跡だった。そこから会話に入れば、保護者の役割や先生がどう修理することになったのかを聞ききっかけになる可能性がある…という説明をされました。

和田：観察しろということだね。ンディヤマーヌ村でそう言われたことを踏まえて、自分で何か観察をし、記憶に残ったことはありますか。

菊地：観察が大事だなと思って、観察しようとしたんですが・・・

和田：何を観察したらいいか分からなかったんですね。

菊地：そうですね・・・たとえば村を歩いていて、木の近くの土に大きなくぼみがあったんです。何だろうと思っていたんですけど、答えは出ませんでしたね。けれど、こういうところを聞いていたら良かったのではないかと。

和田：村で何度もホームステイをしたそうですね

菊地：ンディヤマーヌ村で一回、ンディアンダ村で一回、バガナ村で二回、ンディアンダ村で三回くらい泊めてもらいました。長い時は五泊しました。

和田：泊まってみて、生活を体験して、それまで知らなかった発見はありました？

菊地：食について。食事を共にすることも多いですし、作る過程も見られるので。例えば、ダカールに比べて、ヒエのクスクスを良く食べる。セレール族はそれが好きと聞きます。村のお家の庭先に行くと、何かの葉っぱを干してある家がまばらにあったのですが、それがバオバブの葉だと気づきました。バオバブの葉を乾燥させて粉状にさせ、ヒエのクスクスに混ぜると、ばさばさ感が無くなるということで、どの村でもバオバブの葉を使っていました。葉っぱの使い方を初めて知りました。

和田：食べ物をごちそうになるだろうけど、どういうところを観察してた？

菊地：誰が作ってるとか、材料とか、調理時間、調理道具、食べ方とか。

和田：食材の買い物は誰が行ってました？

菊地：家の中の若い女性ですね。息子のお嫁さんとか、娘さんとか。セネガルは、従兄弟、おじさん、子ども達、おじいちゃんおばあちゃんも一緒に住んでることが多くて、イスラム教が多いんですけど、男性が複数の妻と一緒に住んでることも多くて、ご飯をつくる順番があるので、担当の女性が、買い物と料理をしていました。



和田：昔から村で食べてる食材以外に、どういう食材が入ってきたか聞いたことある？

菊地：輸入しているお米が多くて、タイとかインドとか、インドネシアとかから、村や大きな町の商店に来ている。また、村で化学調味料を使っていたんですが、チェブジェンという魚の伝統的な炊き込みご飯を作るのに使われてて、それも伝統的なものでなかった。

和田：そのような化学調味料を使始めたのはいつごろ？

菊地：聞いた事がないです。

和田：例えば、おばあちゃんが

「昔はコレ使ってなかったわ〜」とか？

菊地：おばあちゃんに聞けばよかったのか・・・男性に聞いてしまいました。

和田：その男性は料理していなかった？

菊地：していなかったです。

和田：他に料理してる男性見なかった？

菊地：はい。和田さん以外（笑）



村の人たちの変化を聞き取る

和田：赴任して二年ほど、研修に同行する以外に、月に一回のペースで、研修をやった村をモニターしてフォローしてくれていますね。その中で、村の人が何かに気づいた、また変化があったということがあれば、具体的に話してください。

菊地：収支やコストを計算する研修をおこなった後のことです。ンディヤマーヌ村のある農民は、玉ねぎを生産していて、多く獲れていたので、自分も周りも「儲かっているな」と言っていたんです。でも研修の後で、売り上げやコストの計算をしてみたら、むしろ赤字に近いようなことがわかった…という話を聞きました。

それから、水についての研修では、水やりは朝にした方がよいという話をしていたんですね。研修に参加した人たちは、水やりを夜にしたり、一日に何度もしたりとバラバラでした。ある人は、それまでは朝に一回、午後に井戸水が戻ってくるのを待ってもう一回と、一日に二度水やりしていたそうです。彼は研修を受けた後、水やりを朝だけにしたところ、井戸に水が溜まるようになり、水が足りるようになったことに気づいたそうです。

また、農民の話ではないんですが、ンディヤマーヌ村に泊めてもらった時、魚売りのおばちゃんと話す中で、魚はどこから持ってくるの、輸送費はどのくらい、この魚は/氷はいくらかなどを聞いていったら、儲けが1回あたり200フランしかないことが分かり、儲けが少ないということにおばちゃんが気づいたということがありました。

二年間の赴任を経て

和田：今まで二年間セネガルに赴任して、特にこういうことが自分でできるようになった、またできるようになりたいなという事は？

菊地：ウォロフ語ができるようになって、農民の方や女性ともスムーズに、笑いながら話すことが出来るようになりました。でも二年いると、慣れてきてしまって、最初の感動や驚きが薄れてしまった気がします。二年前は聞きたいことがあるけど言語が出来なくて聞けなかった。今は言語は出来るけど、最初の驚きが薄れてしまって聞けない・・・というか、もっと突っこんで聞けるようにならないと。

和田：いつまでも新鮮なんてことはありえない。ただ、何かを発見していくってことは常に続けていく。だから感動が薄れたというよりも、聞き方がまだまだということだね。

でも、このインタビューから、二年間で着実に成長していると言えるので、いいんじゃないでしょうか。

菊地：ありがとうございます。

農村で暮らし続けるためのファーマーズ・スクールプロジェクト

どこで セネガル共和国ティエス州ンブル県ンゲニエヌ行政村

だれと 16~24歳までを中心とした青年300人

活動のパートナー Intermondes(アンテルモンド) ※セネガルのNGO

支援パートナー JICA「草の根技術協力事業パートナー型」

なにを セネガル農村部に住む主に若年層の農業従事者が、自分たちの地域において、自然資源を活用しながら農業で生計を立てられることを目標とした事業。水や土を守りながら農業の効率性を上げる知恵を共有し、実践を定着・普及させていくために、研修や農業実践の場の提供(ファーマーズ・スクール)を通して、農民たちの活動を支援しています。



言葉をつむぐことで 生まれた力

坂本 恭子(a little)

原 康子(ムラのミライ 研修事業チーフ)

2019年6月に開催した活動報告会。パートナー団体a little(ア・リトル)の坂本恭子さんに「この1年間、ムラのミライと活動してどうでしたか?」というお話を、「どう?」を使わないで聞いてみました。1年間のコラボレーションは、どんなことを生み出したのでしょうか。

ムラのミライの、ある時/ない時~わたしにとって

康子：関西在住歴わずか3年の私は知らなかったのですが、関西では有名な「551の豚まんのある時、ない時」というCMがあるのですよね。まず「ムラのミライのある時、ない時」を聞いてみたいと思います。

恭子：ずっと関西にいと「みんな知ってて当たり前」と思っていたCMですが、そうではないのですよね。ムラのミライのある時、ない時、どうぞ聞いてください。

康子：西宮プロジェクト1年目を終えて、恭子さんが、プロジェクト開始前はやっていなかったけど、現在はやっていることがありますか？



恭子：そうですね、プロジェクトが始まる前は、出会う、学ぶ、実際にサポートして誰かを支える、といった活動をこなすことに必死で、1年後、3年後、数年後のビジョンを描くことは出来ていませんでした。次々と現れる目の前の課題に、自分や仲間の柔軟性や臨機応変な対応力のみで取り組んでいたと思います。

そうした活動を報告書などで振り返ったりしませんでしたし、ア・リトル以外の誰かにつなぐことができていなくて、その場の対応になってしまっていました。でもムラのみライと1年間一緒に活動をしてみて、私自身がア・リトルの理念のこと、活動のこと、プロジェクトのことなどを、自分の言葉で話す力がついてきました。それまでは、実は創立メンバーの他の2人の言葉を借りて話しているだけだったのです。

先日、プロジェクト開始直後の昨年4月頃のミーティング記録を見直したのですが、私、まったくミーティングで発言していなかったんです。当時は、このプロジェクトでなにが始まるのか、子育てをめぐる社会の課題など、すべてが漠然としていました。ところが、毎月のミーティングの度に、ムラのみライの康子さんと美翔さん（プロジェクト担当の原康子と山岡美翔）に何度も質問されることで、だんだん自分の言葉を身につけてきたと思います。昨年は小学校のPTA会長という大役もやることになったのですが、自分の言葉で話すことは、そんな地域の活動でも活かせました。

また、プロジェクトを通じて事実質問で聞く場数が増えてきたことで、子どもとの対話が変わってきました。思春期真っ只中の娘がいるのですが、彼女の話の聞けるようになってきました。以前は彼女によかれと思って、あれもこれも伝えたいというのが先走っていたのですが、今はまず彼女が話すことを待てるようになってきました。

ムラのみライの、ある時/ない時～ア・リトルにとって

康子：ではア・リトルとして、プロジェクト開始前にはやっていなかったけど、現在はやっているようなことはありますか？



坂本恭子さん

大阪市出身で、西宮市在住歴18年。

PTA会長を務め、友人の市議会議員挑戦を応援する中で、地域の課題や同年代女性の抱える課題を言語化するような集まりの場をたくさん開催しています。



恭子：できるようになったことはいっぱいあります。例えばジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループの助成金を得たことで、報告書、会計処理を毎月きちんとできるようになりました。それに、調査で得られたデータを使って、行政や専門家に、実情や課題を伝えられるようになってきましたし。

あとは「なんとなく同じ気持ちで活動しているんだろうなあ」というのではなく、きちんと各自の言葉でア・リトルの活動理念を共有することもできるようになりました。ムラのミライの2人と月に1回は顔を合わせ、ミーティングをすることで、自然と2人が使う事実質問やメタファシリテーションの恩恵を受けたように思います。

この2人にはよく褒めてもらえるのですが、褒められることで、ア・リトルのメンバーが自信を持って活動することができるようになりました。プロジェクトで忙しくしているにも関わらず、運営メンバー全員が、子育て支援以外の分野での発信力もつけているように思います。

ア・リトルの子育て支援は活動の一部

康子：私たちも月1度のミーティングに参加する度、ア・リトルの皆さんにエネルギーをもらっていたことを思い出してきました。逆に、プロジェクトが始まってしまったから出来なくなってしまうこともあるのではないですか？

恭子：はい、あります。今までア・リトルでは「つどい場」という単発の集まりを頻繁にやっていたのですが、その回数は減りましたね。特に「子育て支援」に特化している団体ではなかったのですが、今は「子育て支援」の側面が強くなってきていますね。

康子：もともと「子育て支援」は主な活動ではなかったということですか？

恭子：そうなのです。ア・リトルは「女性の自立ってどういうことか？」「女性の自立のためにどんなことができるか？」と考えて活動してきたので、子育て支援というのは女性の自立をサポートするひとつの分野であって、ア・リトルの活動すべてが子育て支援というわけではないのですよ。

ムラのミライの担当スタッフはナニをした？

康子：西宮プロジェクトもア・リトルの様々な活動の一部ですものね。先ほど私と山岡が事実質問を投げかけてくれた、月1度のミーティングに参加していた、何かと褒めてくれた、と言ってくさいましたが、他に私たち2人がやったことはありますか？

恭子：西宮プロジェクトは3年間のプロジェクトなのですが、いつも1年後、3年後のビジョンを持ち、どこを目指しているのかを問いかけてくれたり、思い出させてくれたりしました。2018年度、私たちは、一つひとつの講座をこなすことに手いっぱいになりがちだったのですが、2019年4月に1年の振り返りミーティングをした時ビックリしたのは、きちんと1年前に思い描いていたプランどおりにプロジェクトが進んでいたのです！これは、ムラのミライの2人がいつも全体を見てくれていたおかげだと思います。…なんか私、ちょっと2人を褒めすぎてますかね？

康子：はい、ホント褒めすぎです。対談ということで、かなり盛って話しているんじゃないか…と照れながら聞いています。よいことばかり聞いてしまいましたが、ムラのミライと活動していて「ちょっとよく分からないなあ」「なんでこんな事しなくちゃいけないの？」「しんどいなあ」という時もあったかと思うのですが、それはどんな時でしたか？

西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪プロジェクト

どこで 兵庫県西宮市

だれと 産前産後の女性(パートナーも含む)とその支援者

活動のパートナー a little(ア・リトル) ※西宮市のNPO

支援パートナー ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

「2018年度助成プログラム」

なにを 女性の自立を支援するグループa littleと一緒に、子育て中の人たちが中心となり、助け助けられる社会の実現をめざします。西宮市で産前・産後を迎える女性(そのパートナーも含む)と、彼女(彼)たちへの支援を希望する人々を対象に、調査や講座を3年間かけて実施し、地域で助け合う子育ての仕組みづくりをおこないます。ムラのミライは、a littleを中心に子育て中の人たちがその力を最大限活かせるよう、持っている力を引き出しながら、メタファシリテーション手法を用いて支援しています。



負荷のかかるコラボレーション

恭子：はい、確かにそういう時はありましたね。「いつ」というより「いつも」だったかもしれません（笑）

康子：えっ…ということは「しんどいなあ、なんでそんなにア・リトルにばかり仕事を押しつけてくるの、勘弁してよ～」と思っていたということですか？

恭子：はい（笑）ムラのミライだけでなくア・リトルの活動もそうなのですが、常に私の能力より少し高めの仕事を求められているようで、やや負荷をかけられているような状態なのです。ですから、結構もがきながら活動しています。ただ時間が経つと、いつの間にか少し力や自信を付けた自分に気づいて、また新しい負荷を背負えるようになってきています。

康子：なるほど。最近では恭子さんに「康子さん、あれお願い、これお願い」と、負荷をかけられているような気がします…

恭子：そうなんです。今まで何もかも抱え込むタイプだったのですが、だんだん手放すことを学びましたね。これもムラのミライあるとき効果かもしれません。また、自分の対話技術があがったり、「助けて」と言えない社会構造に気づく中で、相談を受けたり、人が抱えるしんどさに気づくことが増えてきました。今でも、自分のできることとできないことの線引きが難しく、多くを抱えてしまうことがあります。

プロジェクト参加者からの声

康子：1年間で調査、地域子育てサポーター養成講座、産前産後のご家族向けパートナーシップ講座という活動をしました。参加者のコメントにはどんなものがありましたか？

恭子：担当した地域子育てサポーター養成講座の参加者からは、8回連続受講することで、自分の産前産後をふりかえったり、今の自分のしんどさとつながって、参加してよかったという感想をいくつも頂きました。参加者にとって「自分もしんどいと言っている」と言える講座になったと思います。調査では私も何人かにインタビューをしたのですが、全員が産後に不安を感じていたとわかりました。なのに「助けて」と言えない状況が調査全体を通じてわかってきました。

康子：「ああ～これは失敗だったな」という出来事はありますか？

恭子：それはないです。でも、産前の方に講座に関心を持って頂くことがなかなか難しく、産前の方を対象にした講座の参加者募集に毎回苦労しています。

「なんでムラのミライと一緒に活動するの？」と言われたとき

康子：ア・リトルに比べて西宮でかなり無名なムラのミライですが、「なぜムラのミライと一緒にプロジェクトやってるの?」「ムラのミライってどんな団体?」と聞かれたことはありますか?

恭子：はい、何度もありますよ。そんなときは「ムラのミライは、途上国で支援を続けてきた実績のあるNPOです。建物や金を渡すような支援ではなく、対話によって当事者自らが課題に気づき、解決方法を考えるメタファシリテーションという手法を使って支援している団体ですよ」と答えています。「なんで一緒に活動しているの?」と聞かれたら、次のように答えています。「ア・リトルは、メタファシリテーション手法を学び、活動に関わる人とのコミュニケーションに役立てています。西宮プロジェクトは、ムラのミライが日本社会の孤立した子育てに気づき、その課題に向き合うパートナーとしてア・リトルを選んでくれたのです。途上国で支援したように、ア・リトルに関わる私たちが自分たちの活動の課題に気づき、持続性のあるものになるよう、私たちが育てる役割を担ってくれています」

康子：ア・リトルあつての西宮プロジェクトです。ムラのミライだけでは孤立した子育ての課題の現場に入っていき、それを変えてゆく活動に関わるなんて絶対できなかったと思います。私たちの方こそ、ア・リトルの活動に関わらせてもらうことができ、本当にありがたいことだと思っています。



ふたつの現場、ふたつの目

久保田 絢(ムラのミライ理事)

前川 香子(ムラのミライ 海外事業チーフ)

通算10年近いインド駐在中、農村・都市両方のプロジェクトに携わった前川香子。どちらもJICAの草の根技術協力プロジェクトという枠組みを使い、ムラのミライが企画・実施するという、いわば「ムラのミライ直轄」プロジェクトでした。昨年からは、JICAの技術協力プロジェクトの専門家という立場でも仕事をするようになりました。



専門家派遣って何？

久保田：JICAプロジェクトへの専門家派遣って、
どういう仕組みなのでしょう？

前川：JICAがラオスで実施している5年プロジェクトがあって、カウンターパートはラオス政府の農業局です。プロジェクトを進めていく専門家という存在がいて、ずっと関わる長期専門家と、要所要所で関わる短期専門家がいる。

今回はメタファシリテーション手法を指導する短期専門家という公示にムラのミライが団体として応募し、そこから私・前川香子を派遣するという形です。

久保田：ラオスの案件は、いつ始まったんですか？

前川：いくつかの県の中からサバナケット県というところをピックアップして、その農業局と一緒に農業をするというプロジェクトで、2017年から始まったフェーズ2の三年目に入るところです。

マーケティングの専門家と灌漑の専門家の二人が、以前にイランでのプロジェクトで、同じく短期専門家として関わっていた中田豊一を通じてメタファシリテーションを知り、感動してラオスのプロジェクトでも最初からメタファシリテーションを取り入れるべきだ・・・となったそうです。そこでムラのミライが応募したのが2017年の春。

私は、このとき初めてラオスにこういう事業があることを知りました。そして、2018年の7月に初めて行き、今年の5月に二回目の渡航。下半期にもう一度渡航予定です。

久保田：プロジェクトで具体的にどんなことをしているのか教えてください

前川：フェーズ1のときに、水路や灌漑設備を整備して水利組合もできました。モデル農家や農場も作りました。地域の水域環境も含めて農業をやっていく基盤を作って、自主的に組合をつくったりしてやっていくモデルができました、と。フェーズ2の軸は、灌漑を維持管理しながら収入を増やしていける農家をサワナケット県で増やしていくというもの。品質のいい米を作ること、商業用の野菜も作って収入を増やすこと、水利も管理していくこと…農業、マーケティング、水利管理という三つの柱がある。まずいくつかの郡でやってみて、できれば、他の郡に拡大していく。

農家に直接やりとりをするのは、主にラオス政府の農業局の人たち。JICAからは、病虫害がでたときの対策、野菜の植え方など、専門家が技術的なアドバイスをする。村人たちの研修参加を促すなどのコーディネートは農業局の人たちがやる。

最終的には、農民側から「こんな作物が作りたい」「トラブルに対処したい」「販売先を見つけて売っていきたい」と言うようになってほしい。水利組合も、問題が起こるたび農業局に苦情を言うのではなくて、自分たちで対処できるようになってほしい。そこを目ざして農民に働きかける方法論として、農業局のスタッフにメタファシリテーションを身につけてほしい、と。私の役割は、農業局の人たちにメタファシリテーションのトレーニングをすることです。

教室の中の論理ではなく、彼らの日常業務の中で意識してメタファシリテーションを使ってもらわないといけない。現状、農民の人たちとやりとりをして、何ができて何ができていないか。これから目指すものと、今の取り組みとにどんな乖離があるのかないのか。それをまず認識しないと、メタファシリテーションを使えない。まずは、そこに重点を置いて指導しています。

久保田：ムラのミライがインドで実施していたプロジェクトで活動していたときと、研修の対象が違うということですね。たとえばインドでは、村人が水域単位の水資源管理を理解できるようにメタファシリテーションを使って気づきを促す…という風に使っていたのが、今度はメタファシリテーションとはこういうものですよ、という研修になってくるといふ事なんですね。



農家の言葉をしゃべる

久保田：研修を受けているのは、どんな人たちですか？

前川：プロジェクトに関わっている農業局スタッフは30人くらい。最初の渡航時の研修では、農民と全く関わりないスタッフにもメタファシリテーションというものを知ってほしいという要望があり、40人ほどが参加されました。5月の研修では、実際に農家とやりとりをしている30人ほどを対象を絞りました。次回の渡航（12月）ではさらに絞り、その中から指導員を養成して、ゆくゆくは指導員が他のスタッフにメタファシリテーションを指導できるようになる、というのを目指しています。

久保田：研修参加者の中には「なんでこんなことやらなきゃいけないの？」という人もいましたか？

前川：そういうことはなかったけれど、どういう風に使えばいいか、まだつかめていない人も多いですね。今のところ6~7人ほどはコツをつかんでいます。

農家の人たちと対等な関係を築くために、どんな言葉を使えば、“この役人はコチラの話をちゃんと聞いてくれる”と思ってもらえるか。

農業局の役人だからと言って、農業や農家の事をすべて知ってるわけではないんです。品種や肥料について、農家の人がわからないような専門用語や数字を使ってしまっていて、そのことに自分自身気づいていなかったり・・・。



今回、座学で前回の研修のふりかえりをした後、

三カ所の活動現場についていったんですね。日常の業務として、農業局スタッフが農民にやってる研修にオブザーバーに行き、それを踏まえて研修を組み立てました。

ある現場では、農家に対して、イラストなどを見せながら、稲作の研修をしていました。種もみの選び方、苗の育て方、肥料はこの段階ではコレ、次はコレ・・・と説明する中で、「この肥料は1ヘクタール当たり何キロ」と言っていた。ただ農家が土地を“ヘクタール”で認識しているのか、畑は真四角なのか、というと・・・。

100グラムの肥料が、どれくらいの量なのかを農家の人に説明するために、どうするか。

農家の人が持っている道具って、どんなもの？ザルだとか、たらいとか、ひしゃくとか。

じゃあ、あの農家さんが持ってた“たらい”にはどのくらい入る？一キロ。

あなたの田んぼの広さは？40平米。

では、1平米あたりの肥料は、たらい何杯分か。

どう説明すれば、実際の田んぼの面積に応じた肥料の量をわかってもらえるか…農家の言葉でしゃべっていますか、ということですよ。これができなければ、「農家に教えた」といっても一方的なもの。研修の時に農家が「わかりました」と言っても、しばらくたつと実践してないことがわかる・・・というようなことが起こってしまいます。

こういう風に、彼らの業務の中でどうメタファシリテーションを使えるかということを徹底的にやっています。

プロジェクトが終わるまでには、指導員が1~2人は誕生していただいいですね。

虫の目、鳥の目

久保田：専門家派遣と、プロジェクトと、どっちが楽しいですか。

前川：どちらも楽しいですけど、自分たちのプロジェクト現場で、毎日試行錯誤しながらやっていく醍醐味は…やっぱり、あれに勝るものはないかもしれないですね。

一方、専門家派遣や講師派遣で、地域づくりをしたい人たちのお手伝いを間接的にできることも、うれしいなと思います。いずれにせよ、実際に村の人とやりとりするのは楽しいですよ。そこから研修や活動を組み立てていく。

久保田：専門家派遣だからこそ面白いなということはありませんか？

前川：客観的にメタファシリテーションという手法を見れるようになりました。

インドに駐在していた当時、メタ視点で見ることができていたのかは謎なんですよね（笑）

インドの時は、農家の村の人たちとダイレクトにやり取りをしていて、彼らがこれから村をどうしていくか、いま何をしているのか、何をしようとしているのか、四苦八苦をつかめていた。ラオスは、農家との間に農業局スタッフというワンクッションがある。いま農業局の人たちがこうだから、村の人たちはこんな状態なんだろうな…と間接的にわかる。



それから、プロジェクトをどう組み立てるかということ。

プロジェクトの目指すことと、村の人たちがどう暮らしたいかということと、どのように、
かみ合わせられるか…かみ合わせられない点も含めて客観的に見れるようになりました。

インドのときは、地上の目でした。村の人たちと目線を合わせて、2D的に見ていた。時々
は村の人と一緒に鳥の目線になって「来年度はこうしていきたいから今年度はこうしよう」
「次の雨季までにこれだけのアクションプランができていればいいから、じゃあ今は研修
をスピードアップして」…という風にしてはいたけれど、3Dの全体像を見るというメタ視点ま
ではできてなかったと思うんですね。

インドから離れて、今回ラオスで専門家としてプロジェクトに関わるようになって、メタ
ファシリテーションがどういうものなのか言葉でわかるようになってきたという感じです。



ムラのミライについて

「ない」ことは本当の問題なのか？

認定NPO法人ムラのミライは、1993年に岐阜県高山市で設立されました。設立当初は「インド山村部の貧困層を助けよう」と、識字教室や収入向上活動など、「ない」ものを投入する支援から始まりました。

しかし、さまざまな活動を経て、都市化と市場経済化の進展がコミュニティとコミュニティの維持してきた自然資源やセーフティネットを衰退させ、多くの社会課題を生んでいること、それが海外・日本に共通する構造であることに気づきました。



コミュニティに「ある」ものを引き出し、課題解決を促す

そこで、住民との対話を通じてコミュニティに「ある」もの＝彼らの持つ経験や知識を引き出し、住民自身による課題分析・解決を促す独自の「メタファシリテーション手法」を開発。徹底的に住民主体にこだわり、インド、ネパール、セネガルで、コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出していくためのプロジェクトを実施してきました。

地域づくりで、医療で、子育てで

「●●がないから、××ができない」という思い込みをひっくり返し、住民を本気で課題解決に向かわせる力を持つと、高い評価を受けるようになったメタファシリテーション手法。この手法を書籍『途上国の人々の話し方』やムラのミライの理事・職員・認定講師によるセミナー・研修で伝え、住民の行動変化を促すスキルを持つファシリテーターを育成してきました。国際協力分野だけではなく、日本国内での地域づくりや、医療・介護、子育てといった分野で実践する人が増えつつあります。



ムラのミライの活動方法論「メタファシリテーション」とは

メタファシリテーション手法とは、ファシリテートする側が当事者に対して事実のみを質問していくことによって、当事者が思い込みに囚われることなく自分の状態を正確に捉え、そのことによって自分の経験知から課題の解決につながる示唆を主体的に得る過程を創り出す手法である。またこの手法は、ファシリテートする側が事実のみを訊くことによって自分が現在何を訊いているのか正確に認知すること、すなわちファシリテートする側のメタ認知 (meta cognition) を促し、ファシリテーションの過程そのものの客観性とファシリテートする側と当事者とのコミュニケーションの効果を最大限に担保する。